本丸中学校　２年　小野塚彩音（おのづかあやね）

一九四五年、八月。一発の原子爆弾が落とされ、広島の街は一瞬にして壊滅し、多くの人々の命が奪われました。私は、平和記念式典に実際に参加し、資料館を見学しました。そこには、目を背けてしまいそうになるほどの、残酷な写真。とても悲惨で、今の日本がいかに平和か、実感させられました。

このような悲劇が二度と起こらないように、私たちが、次の世代へと語り継いで、世界から核兵器がなくなっていってほしいです。

第一中学校３年　加藤大貴（かとうだいき）

１９４５年８月６日、一発の原子爆弾が広島市に投下され、多くの未来ある命が奪われました。自分は今回の広島派遣で、原子爆弾の恐ろしさや平和の大切さを肌で感じました。そこには、戦争の悲惨さを表す目を背けたくなるような写真や当時の物がありました。自分はそれを見たとき、この過ちを絶対に繰り返してはいけないと思いました。また、あの過ちをどうやったら繰り返されないか、今自分にできることは何か考えていきます。

猿橋中学校３年　伊藤幸聖（いとうこうせい）

原爆が投下されてから７４年がたちました。式典では５万人を超える参列者が訪れ、死者を悼む人達が平和を祈り、黙とうを捧げました。資料館では恐怖、悲惨さを感じ、原爆ドームでは、原爆の凄まじい威力を感じることができました。

私はこんな恐ろしい悲劇をくり返さないために、後世の人達や無惨さを知らない人達に伝えていくことが大切だと思いました。

東中学校３年　渡邉彩加（わたなべあやか）

７４年前の８月６日。広島に原子爆弾が投下され、あたりは一瞬にして焼け野原になりました。私は、平和記念式典の参加や資料館の見学を通し、このような悲惨な事はもう二度とあってはならない、と以前よりも強く感じました。また、式典や資料館には日本人だけでなく海外の方も多くいました。たくさんの人が平和への祈願をしているにも関わらず、まだ世界では核実験が行われています。核兵器が完全に廃絶される事を強く願います。

川東中学校３年　宮野舜也（みやのしゅんや）

原子爆弾が落とされた７４年前の広島。たくさんの人々が普通の暮らしからかけはなされてしまいました。私は、原爆資料館で当時の方たちが残した日記、平和への願いをたくさん見てきました。平和記念式典に出席して、原爆によってもたらされた悲しみ、恐怖、そして平和の尊さと非核への思いを痛感しました。何十年もの間、日本は核兵器の恐怖を発信し続けています。若い世代の私達が、後世や世界中の人に伝えていくべきだと思いました。

七葉中学校３年　中野歩夢（なかのあゆむ）

多くの命と夢や希望を奪っていった原子爆弾が投下されてから七十四年。私は平和記念式典に参加し、資料館を見学してきました。

そこには、写真や絵、ボロボロになった服などがありました。その写真を見たときに、もう二度とこれをくり返してはいけないと思うと同時に当時の日本で起きたことは絶対に風化させてはいけないと感じました。

私たちは、このことをしっかりと受け止め、後の世代に伝えていかなければと思いました。

佐々木中学校３年　木滑萌果（きなめりもか）

私が生まれるずっと前、大切なものを一瞬にして壊してしまう恐ろしいモノが日本を襲いました。その痛々しい記録が広島には多く残されています。幸せな日々を奪われた人々は何を感じたでしょうか。そこには笑顔は一つもなかったでしょう。広島には「もう二度と繰り返さないでほしい」そんな願いがあふれていました。私は、その願いを強く受け止め、伝えていくことが大切だと改めて感じました。笑顔がたえない世界が続くことを願います。

豊浦中学校３年　髙橋拓巳（たかはしたくみ）

一九四五年八月六日に原子爆弾が広島に落とされた。爆弾は一瞬で街を破壊し、少なくても十三万人の人々が亡くなった。

平和記念式典の参加や平和記念資料館の見学を通し、改めて原爆の恐ろしさを感じました。そして原爆や戦争の悲惨さを肌で感じることができました。

このようなことを二度と起こしてはいけない。だからこれらの未来を引っぱる私たちが平和について考えていかなければなりません。

紫雲寺中学校２年　渡辺匠音（わたなべたくと）

私たちは今、幸せな日々を送っています。ですが過去には当たり前のことができない歴史がありました。その歴史の一つに「原子爆弾が投下される」ということがありました。原爆は大切なものを奪い、広島に悲しみを残していきました。過去の凄惨な歴史を繰り返さないために私たちが後世の人に伝え、世界に原子爆弾というものを伝えていかなければいけないと思いました。そして二度とこのような惨事が起こらないことを願います。

加治川中学校３年　小田花鈴（おだかりん）

広島に行って一番印象に残ったのは、資料館で見た被爆者が描いた絵です。学校やネットで色々学んだつもりでしたが、この悲惨な絵を見てまだ自分は何も知らないのだと衝撃を受けました。また、その絵は平和な世界のために何ができるかを考えるきっかけにもなりました。人々の立場や主張の違いを乗り越えるために自分に何ができるかはまだ分からないのですが、それを考えるという気持ちの大切さをまずは伝えていこうと思います。